
薔薇の契約

夕玉 黄華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

薔薇の契約

【Nコード】

N1056A

【作者名】

夕玉 黄華

【あらすじ】

「君の名前を教えて欲しい。」「私の名前？・・・あなたが付けて。」「居場所を求め、闇をさまよう吸血鬼と、記憶を失くし、名前を忘れた少女。互いを知る度に苦悩し、惹かれあう。少し切ないゴシックラブファンタジー。」

プロローグ

満月の夜。

月の光は人の心をかき乱し、狂気へと誘う。

満月は、昔から狂気や凶兆の象徴とされてきた。

赤い月が輝く夜。

死を忘れた彼らが鮮血を求め、夜の闇をさまよう。

血の色によく似た月光が彼らの狂気を解き放つ。

彼らを人は吸血鬼と呼んだ。

気が付くと彼の手を取っていた。体温のない冷たい手。
今にも泣きそうな顔。なんて悲しそうな顔をするんだろう。
切なくて胸が苦しくなる。そんな顔見たくないのに・・・。

あなたに笑っていて欲しい。私が見たいのはそんな顔じゃない。あなたの笑顔が見たいの．．。

どうしてそんな顔をするの？私はまだあなたの笑顔を知らない。どうすればあなたの笑顔が見れるの？

どうすればあなたの心に近づけるの？

こんなにも傍にいるのに、心の距離は．．。

お願いだからもう1人で抱え込まないで。あなたは優しくすぎる。きつと、あなたは気づいていないだけ。

こんなに冷め切った体なのに、あなたの腕の中はとても暖かい。もう少し。ほんの少しだけでいい。この温もりを感じていたい。

例えばあなたが人ではないとしても．．。

第1話

少女はゆっくりと目を開けた。

ベッドがきしむ音を聞き、ついさっきまで眠っていたのだと分かった。

窓から差し込む月明かりだけがこの暗い部屋を照らす。

体を起こし、部屋の中を眺めた。見知らぬ天井、壁、柱、家具。

目覚めた少女の目に映るすべてのものが、何もかも初めて見るものばかりだった。

ここはどこだろう？

そう思い、辺りを見渡していると、部屋の隅に置かれた鏡台が目についた。

ベッドから下りて、その鏡台の前に立つてみた。鏡に映った少女の顔。

「これが．．．私の顔？」

普通なら見慣れているはずの自分の顔。しかし、少女の瞳には初めて見るかのように映っていた。

これが私の顔．．．。違う。これは私の顔じゃない。こんな顔見たことない。

でも、それなら私の顔は？私はどんな顔をしていたの？

私の顔は．．．。分からない。思い出せない。いくら考えても答えは見つからなかった。

「あなたはいったい誰なの？」

少女は呟くように、鏡に問いかけた。もちろん返事は返って来ない。返って来るはずはなかった。

そして、ようやく少女は気が付いた。鏡に映っているのは、ほかでもない自分だということに．．．。

これが私の顔なの？本当に？

怖い。自分の顔が分からないなんて。

私の顔は．．．。私の顔は．．．。思い出せない。

不安と恐怖に駆られ、逃げるように部屋を飛び出した。

部屋を出た少女が目にしたものは、規則正しく並んだ扉とどこまでも続く廊下。

そして、廊下に点々と置かれたろうそくの灯りだけがこの廊下を照らしていた。

ろうそくの灯り以外は何も見えないのではないかと思うほど、ここはとても暗く、

その灯りで廊下に敷き詰められた赤い絨毯の色がかるうじて識別できずぐらいだった。

どんなに走っても、どこに行っても暗く、その景色は変わる気配を見せない。

少女は途方に暮れて立ち止まった。

そういえばここはどこだろう？．．．本当に私は知らないの？

自分の顔を思い出せないように、もしかしたら忘れてしまっただけ？それとも、ここは私の知らない場所？

どちらでも同じかもしれない。今の私にはここがどこなのか分からない．．．。

「ねえ。少しくらい喋ってくれてもいいじゃない。」

女の人？どこからか聞こえてくる女性の声が少女の耳に届いた。

「聞いているの？」

少女は声だけを頼りにして、聞こえてくる声の持ち主を探した。

歩く度に少女の耳に届く声も少しずつ大きくなっていく。

少女が声のする方へ近づいて行くと、暗い廊下に一筋の光が見えた。ほんの少し開いた扉から聞こえてくる声。

探していた声はそこから聞こえているようだった。

少女がそこからそつと中を覗くと、声の持ち主らしき女性が立っていた。

あの人に聞けば何か分かるかもしれない。

「あの．．．。」

そんな期待を抱きながら声をかけようとした時、その女性のすぐ傍にもう一人誰かが立っていることに気づいた。

黒い服を身に纏った、銀色の髪をした男性。

なんて綺麗な人なんだろう。

顔はよく見えなかったが、気が付くと彼に見とれている自分がいた。どうしても目を逸らすことができない。

何かに取り付かれたかのように、彼だけを見つめていた。

少女にとっては彼の存在が美しく思えた。

「私の体を求めているんでしょう？ここに来る男はみんなそうだもの。」

部屋にいた女性が彼に歩み寄り、彼の首に両腕を回した。

「それとも、ほかに何か欲しいものがあるのかしら？」

女性は微笑みながらそう言った。

「血を．．．。」

「血？」

その男性は両腕でしっかりと女性の腰を抱え込み、体を引き寄せた。それからあつという間のことだった。

あまりにも突然のことで、少女は何が起きたのか理解できず、思わずその場に立ちすくんでしまった。

彼が女性の体から腕を離すと、女性が床に倒れ、女性が起き上がることは二度となかった。

やっと状況を把握した時にはもうすでに手遅れだった。少女は言葉を失い、その場から動けなくなっていた。

目の前に広がる目を疑いたくなるような光景。

彼の唇からは赤い液体が滴り落ち、口元から覗いた鋭く尖った牙が人ではない証のようだった。

少女が恐る恐る彼を見つめていると、彼も少女に気づいたのだろうか。

冷めた目で扉から覗いていた少女を見つめた。

少女が初めて目にする彼の瞳は血のように赤く、凍りついたように冷たい。

そして、その整った顔立ちは美しいとしか言えなかった。でも、どうしてそんな顔をしているんだろう？

こんなに綺麗な顔なのに……。悲しみに歪んでいる。

少女は扉を開け、彼がいる部屋の中に入った。

「どうして逃げないんだ？」

彼は冷たい口調で少女に言った。自分でもよく分からない。

彼の言うように逃げた方が良かったのかもしれない。でも……。

「見ただろう？僕は……」

赤い瞳が少女を拒絶する。それでも彼に近づいた。

「あなたは悲しんでいるの？」

そう言つて、少女は右手で彼の頬を触れた。

少女の行動に彼は驚き、震えるような声で少女に尋ねた。

「怖くないのか？」

少女は頷き、赤い瞳を見つめた。

怖いとは思えなかった。

こんなに冷め切った体なのに、あなたは……。

「とても優しい目をしているから。」

少女が微笑むと、彼は何も言わず、触れられていた少女の手を握りしめた。彼の手は少し震えていた。

「名前……。」

「え？」

「君の名前は？」

「私の名前？私の名前は．．．。」

あっ．．．。

少女はやつと理解した。どうして今まで気がつかなかったんだろう。分らないのは、思い出せないのは自分の顔だけじゃなかった。

「私．．．。」

彼は少女の名前を待っているようだった。決して少女から目を逸らそうとはしない。

握りしめている手の力が少しずつ強くなっていく。

しかし、いくら考えても、どんなに思い出そうとしても、少女には名前すら答えられない。

それどころか、覚えていることは何１つとしてなかった。何も分らない。何も思い出せない。

ここはどこ？私の名前は？私は．．．

私はいったい誰？

第2話

静寂が続く。途切れた会話。

言葉も交わさず、ただ互いを見つめ合うだけだった。

血で染まった唇が微かに動き、溜息が漏れた。

「もういいよ。」

溜息と共に紡がれた言葉で、静寂は破られた。

「吸血鬼になんて教えたくないんだろう？」

「違う。」

違う。私の名前、あなたに伝えたい、知ってもらいたい。

でも、伝えられない、知ってもらえない。思い出せない・・・。

少女は彼から目を逸らし、うつむいた。泣いてしまいそうだった。

伝えられないもどかしさと、思い出せない悔しさで胸が苦しい。

これ以上彼の顔を見ることはできなかった。

目の前は涙で滲み、視界が霞む。頬を流れる涙は止まることなく溢れ出す。

その様子に気づいたのか、彼は少女の顔に手を当て、優しく涙を拭いた。

少女が顔を上げると、彼はゆっくり歩き始めた。

静かな部屋に足音が響く。窓の前に立ち止まり、静かにその窓を開けた。

「もうすぐ夜が明ける・・・。」

空から降り注ぐ光が月光から朝日に移り変わろうとしていた。

初めて見る横顔。悲しげな表情はやはり全く変わらない。

それどころか、赤い瞳がますます愁いを帯びているようにさえ思える。

月の光を受けて夜風で揺れる髪が輝き、美しさをいつそうひきたてる。

思わず見とれてしまうほど・・・。

「僕のことは忘れて。」

そう言うと、彼は少女に背を向け、窓から身を乗り出そうとした。
「待って。」

行かないで。忘れたくない。忘れることなんてできない。
少女は彼の背中にしがみついた。

「あなたの．．．あなたの名前を。」

とっさに出た言葉。とにかく引きとめようと必死で、
言葉を選んでいる余裕なんてなかった。

少しでも長く傍にいたかった。離れたくなかった。

でも、彼からは何の反応もない。振り向いてもくれない。
怒ってしまったのだろうか？少女は腕の力を緩めた。

えっ．．．？

高鳴る鼓動。心が支配される。冷め切った体が少女に触れた。

二人の距離を隔てるものは何もない。

少女は抱きしめられていることに気が付いた。

「クロード。」

かき消されそうな声で少女に囁いた。切なくなるほど悲しげな声。

「クロード？」

少女が顔を上げ、互いの視線が交わった。

それと同時に一瞬、困惑したような顔を見せ、少女の前から姿を消した。

「え．．．？ちょ．．．ちょっと待って。」

慌てて窓を覗いた。どこにも彼の姿はない。

変わりに太陽が姿を現し、夜の終わりを告げようとしている時だった。

「ここで何やってるんだい。」

突然聞こえた罵声。誰．．？

声がする方へ振り向くと、少し年老いた女性が立っていた。

「ああ。あんたかい。やっと目覚めたようだねえ。」

そう言つて、女性は少女の傍に近づいた。

「あのお。あなたは．．？」

「あたしかい？あたしはこの支配人のアンナ。」

「支配人？」

「そんなことより、あんたは無事みたいだね。」

アンナは床に目を落とした。彼が殺した女性が倒れている青ざめて血色を失くした顔。決して目を開けることはない。

すっかり忘れていた。少女は周りが見えなくなるほど、いつの間にか彼に心を奪われていたのかもしれない。

「この子の首を見てご覧。この傷は吸血鬼の仕業さ。」

アンナは指差した。ついさっきまでそこにいた彼が残した傷痕を。

「ここ数年、この辺りで吸血鬼の被害が増えてきていてねえ。」

しかも被害者のほとんどが娼婦。これじゃあ商売になりやしない。

本当に困つたものだよ．．。」

娼婦？商売？何を言っているんだろう？いつたいここは．．。

「こ．．．ここはどこなんですか？」

「ああ。ここは、そうだねえ．．。娼館とえば分かるかい？」

「娼．．．館？」

「驚くのも無理はない。あんたはここへ売られて来たんだよ。」

売られた？

「私は．．．私はこれからどうなるんですか？」

「もちろんここで働いてもらうけど．．。」

「働く？何をすればいいんですか？」

「ちよつと。ここは娼館だよ。体売ればいいに決まっているだろう？。」

アンナは吐き捨てるように少女に言った。

「世間知らずな子だねえ。いつたいどんな環境で育つたんだい？」

聞きたいのはこっちの方。売られるなんてきつと普通じゃない。

私はいったい何をしたんだろう？どんな人生を歩んで来たのだろうか？
床に横たわっている女性に目を落とし、あの時聞いた言葉を思い出した。

「私の体を求めているんでしょう？ここに来る男はみんなそうなの。」

「この人もここで働いていたんですか？」

「そうだよ。娼館にいる女はみんな娼婦。当たり前のことだろう？」

説明するのが面倒だと言わんばかりの態度を見せた後、不思議そうな目で少女を見つめた。

「あんた．．．大丈夫かい？顔色も少し悪いみたいだし．．．。」

今日はまだ客の前に出せないねえ．．．。早く自分の部屋に戻りな。」

「自分の部屋？」

「あんたが寝ていた部屋だよ。今日はそこでゆっくり休んだ方がいい。」

「でも、この人は．．．。」

「心配しなくていいよ。この子のことはあたしが片付けるから。」

アンナは少女の腕を掴み、部屋の外に追い出した。

「あんたも吸血鬼には気をつけるんだよ。」

そっくり残して、アンナは扉を閉めた。

夜が明け、太陽は高く昇り、そして沈む。

空には満月が浮かび、再び夜が訪れた。

今はもう使われていない部屋。昨日彼に出会った場所。

「こんなところにいたのかい？ずいぶんと探したよ。」

「私を？」

「あんたを買いたいって言う客が来てるんだよ。」

「で．．．でもまだ客の前には出せないって．．．。」

「そう言ったけど、これを渡してくれって言うから。」

少女に差し出されたのは一本の薔薇。

白い花びらが少しピンクに染まっていた。

優しい香りを放ち、可憐に咲いている。

「もしかして知り合いなんじゃないかと思ってねえ。」

私を知っている人？

「その人はどこにいるんですか？」

「あ．．．ああ。あんたの部屋で待ってもらっているけど．．．。」

私を知っている人。でも．．．。

例えその人が私を知っていても、私は覚えていないかもしれない。

自分のことさえ思い出せない私が、いったいその人の何が分かるだろう？

きっと分からないに決まっている。

それでも、少女はどこかで期待していたのかもしれない。

もしかしたら．．．。

「ちよつと。どこに行くんだい？」

少女に声は届かなかった。

ささやかな期待を捨て切ることはできず、自分の部屋へ急いだ。

ずっと不安だった。何も分からなくて、何も思い出せなくて。

でも、やっと私を知っている人に会える。私の名前も分かるかもしれない。

長い廊下を走り抜け、たくさんの人にすれ違いながらやっと辿り着いた。

少女の息はまだ荒い。

少女は薔薇を握り締め、扉を開けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1056a/>

薔薇の契約

2010年10月16日00時12分発行